

目的 古代から我々の祖先の生活を支えた最も重要な植物に麻類がある。その麻は糸となり布となって家族の衣服となる他に調布として貢納され、古代国家の経済を支えてきた麻の用途は幅広く、網索、網、袋、畳糸、小は鼻緒に至まで、麻なくして生活は存立しなかった。現在の繊維工業の発達は目ざましく、天然繊維の改良、化学繊維の開発・改質などにより我々は実に豊かな衣生活を享受しており、恐らく衣料原料としての麻類、特に大麻の復活はあり得ないことと思われる。この麻類の終焉にあたり、その利用の全貌を明らかにし、記録に止めることは誠に意義深いものと考えこの研究を進めたい。

方法 今回は宮城県内の市町村史・誌等から麻類および衣料原料に関する記述を収集、整理し検討する。

結果 宮城県において主に利用されていた繊維は、麻(大麻)、苧麻、藤、葛、綿、絹などである。特に麻(大麻)の植性は県内の気候・風土にかなっていたこともあり、ほぼ全域において盛んに栽培が行われ、衣料だけではなく作業着、網、袋等に幅広く利用されていた。岩手県に隣接している若柳町・南方町は麻の多産地で主に蚊帳の生産に用いられその商圏は広く県外にまで及んでいた。それに反し、麻の栽培に関する資料に乏しい県北部海岸沿いにおいては、藤、楮、鹿皮がその中心を成していた。